The Association of Art Education Newsletter

# 美術科教育学会通信 No.93 2016.10.20

□巻頭言　□第 39 回静岡大会案内（第二次案内）　□理事会報告　□リサーチフォーラム報告
□研究ノート（工作・工芸領域部会／アートセラピー研究部会）
□リサーチフォーラム予告　□本部事務局より

## 巻頭言
## 査読者を最高の同志にしよう

研究部担当副代表理事　学会誌編集委員長　直江俊雄（筑波大学）

### 初めての投稿論文への酷評

この学会通信が会員の皆様に届く頃には、査読結果が投稿者に通知され始めているかもしれません。私のような小心者ですと、通知を開く瞬間というのは、思わず目を閉じてしまうような恐怖がありますが、皆様は、いかがでしょうか？今回は僭越ながら、投稿者の皆様への励ましの意味を込めて、多少暴露的に、投稿と査読にまつわる個人的経験を述べさせていただきたいと思います。

私が大学院生として初めて本学会誌に投稿したときのことです。固く閉じた目をこわごわ開いて結果通知を確かめると、そこには、B 評価とともに「この論文には、調査はあるが思想がない」という趣旨の酷評（と当時の私には受け取れました）が書かれていました。「思想がない」というのは、曲がりなりにも学問を始めようとしている若者にとって、かなり重大な宣告ではありませんか？「お前の頭の中は空っぽだ」と言われたようなものです。

私は、研究者としての資質まで否定されたような気持ちになり、将来も含めて「もうだめだろうか…」と思わず友達に電話して慰めてもらいました（多分そんな気弱なことをしたのは、生涯でその一度きりです）。編集実務をしている今から思えば、修正すれば掲載の見込みがあるのですから、失望する必要は全くないのですが、二晩くらいは絶望の淵に沈んでいた記憶があります。

査読者の指摘は具体的ではなかったので、それが例えば学問上の「〇〇主義」などの思想的裏付けをもつべきであるという趣旨だったのか、単に考察が浅いという評価を述べていたのかは判然としません。思想が浅いか深いかは別として、投稿時の私の意図としては、その研究に関する自分なりの「思想」に当たる内容は、すでに別の論文誌に書いてしまったので、その学会誌投稿論文では、紙面をほぼ全て調査分析にあてるというように、書き分けたつもりでした。

この査読意見から、私は一つの教訓を得ました。査読者が、私が過去に書いた論文を全て知った上で、それと合わせて評価してくれると思うのは、甘えでした。投稿したその論文一本だけで、思想とその実証を含めた一貫性をもち、これまでの研究との差異や独自性を明確に示していたら、より賢い投稿者として振る舞えたでしょう。

その約十年後、国際美術教育学会誌の編集委員に加わるように依頼されたとき、英語圏以外も含めたさまざまな国の投稿者の過去の関連論文まで調べた上で査読するのは大変だ、という心配が思わず口をついて出ました。すると当時の編集長は、きっぱりと、その必要はない、と答えました。査読対象となるその論文一本だけで、査読者を納得させるのが、優れた投稿者の条件であると。

十年前の初投稿で気づいた苦い教訓が、ここでつながったようにも感じました。もちろん、査読者として

は、出来る限り幅広くその分野の研究を知った上で査読に取り組むべきであることはいうまでもありません。しかし限られた時間の中で神経を削る査読者に、関連分野のすべての膨大な研究成果を常に把握した上で判断しなくてはならないというような、過大な要求をすべきではないでしょう。それは第一義的には、投稿者が自分で、その論文の中で示して見せることなのです。

**『美術教育学』賞論文への酷評**

もう一つ、投稿者としての私と査読者とのかかわりについて、記憶に残る経験があります。ある論文への査読に、A 評価ではあったのですが、「この点が、誠に残念である...」というような厳しい（と当時の私には受け止められた）コメントが添えられていました。

自尊心から反発したくなる気持ちを少し抑えて、もう一度そのコメントを読んでみると、私がなんとなく自分の論文に感じていた不満を、予期しなかったような言葉で指摘してくれていることがわかってきました。私はその査読者の批評に応えるという理由で、論文を大きく書き換えることを許してもらいました。

のちにその論文で『美術教育学』賞をいただいたときの受賞者スピーチで、私は、名前がわからないその査読者が授賞式の場に参加していることを願いつつ、厳しい指摘をしてくれたことに感謝の言葉を述べました。実に、その査読者の苦言があってこそ、論文が今の形になったのであり、その意味で査読者は投稿者にとって批判者でありながら、また同志なのです。いえ、最終的に同志となるかどうかは、投稿者がその批判をどのように自分の研究に活かすかにかかっていると言えるでしょう。

査読者を同志にしよう、と書きましたが、それは指導教員や共同執筆者の役割とはもちろん違います。査読者は通常、問題を指摘したり疑問を呈したりしますが、では具体的にどうすべきか、ということは必ずしも教えません。「思想がない」「誠に残念だ」そんな大雑把でとらえどころのない査読結果が来ても、好機到来ととらえてはいかがでしょう。自分の頭で考える機会をくれたのです。具体的に「このとおりに直せ」との意見だけであれば、投稿者は査読者の奴隷です。一方、疑問や矛盾の指摘であれば、それをどう解決するかという創造的な仕事は、投稿者の側に投げ返されます。修正された論文は、査読者の意見に応答していながら、完全に自分のオリジナルです。

投稿者の論文執筆活動は、通常、孤独で苦労の多いものです。そこに、査読者という対話の相手をもたらしてくれるのが、ピア・レビュー方式の恩恵ではないでしょうか。もちろん、査読者との相性もあるでしょう。しかし、匿名の専門家を相手に、「どう書けば自分の研究の価値を認めさせることができるか」に挑戦できる過程は、なかなかスリリングで楽しいものです。自分の研究姿勢とは対極にあるようなタイプの査読者に当たったように思えても、悲観する必要はありません。その査読者との対話に答えていくことは、自分と異なる思想を知り、自分の研究の限界を広げていく上でまたとない好機です。

私の個人的な意見では、このためだけに年会費を払って会員になるメリットがあると言っても過言ではありません（ただし、査読者は無報酬でボランティアですので誤解なきよう）。投稿者は、論文が無修正で掲載されるような水準を目指すことは当然ですが、たとえ修正意見がついても、自分と同じように忙しい研究者が時間と労力を割いてこの論文のために意見を書いてくれたのです。それを無駄にせず、この研究を一歩進めるための鍵を見つけよう、という気概で受け止めてもらえれば、査読者の努力が報われるような気がします。査読がどれほど苦労の多いものかということは、またいつか別の機会に書くことができればと思っています。

**学会誌編集規則の改正について**

学会誌の査読はご承知のように匿名の査読者によって行われます。その査読者一覧を事後に公表することは、査読者の貢献を認め、責任ある査読体制を会員と社会に示す意味があるとの観点から、9 月 4 日に開かれた理事会において、下記のように「学会誌編集規則」の改正が決まりました。個々の論文についての査読担当者は公表されませんが、「査読委員」全員の氏名を一覧として、学会誌の巻末に掲載する予定です。

■「学会誌編集規則」改正後（ゴシック体部分を追加）
第 10 条　学会誌委員会は, 投稿論文の採否を審査するため, 査読者に査読審査を委嘱する。**当該号の発行時に, 査読者の氏名一覧を「査読委員」として公表する。**

私は、論文査読とは、上位者が下位者を裁くのではなく、研究者仲間が共に成長するために、厳しい意見を含めて誠実に指摘し合う場であると思います。査読者は挑戦者である投稿者を称え、投稿者は自分を成長させてくれる査読者に敬意をもつ、そのような関係の形成に、今回の規則改正が活かされればよいと願っています。

※なお、規則改正告知を除き、本稿で述べた投稿と査読の行為に関する見解は私個人のものであり、必ずしも本学会、ならびに本編集委員会を代表する見解ではありません。あくまでも、投稿者への励ましととらえていただければ幸いです。

# 静岡大会（第二次案内）　～ホビーのまち静岡へようこそ！

第 39 回美術科教育学会静岡大会　大会実行委員長
伊藤文彦(静岡大学)

大会テーマ

「夢をつなぐ美術教育の未来」

ごあいさつ

第39回美術科教育学会 静岡大会を静岡県コンベンションアーツセンター（グランシップの９Ｆ、10Ｆ）で開催いたします。「夢をつなぐ美術教育の未来」を大会テーマとし、研究発表、研究部会、総会に加え、「ホビーのまち静岡」を楽しんで頂けるような講演会等を企画しました。

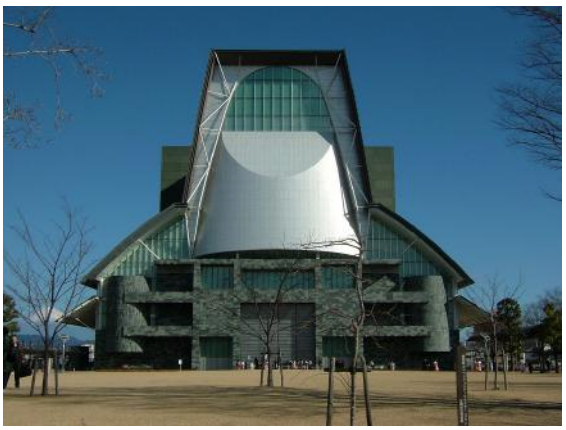
静岡大会では、美術教育に関する交流の活性化をねらいとし、他学会と連携して、さらなる学術的研究の発展を目指していきます。

多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

**第 39 回美術科教育学会静岡大会**

http://artedu-shizuoka.com

◆主催　美術科教育学会
◆協力　日本美術教育学会　大学美術教育学会
◆会期　平成 29 年 3 月 28 日（火）・29 日（水）
◆場所　静岡県コンベンションアーツセンター
（グランシップ９・10Ｆ）



開催場所：JR 東静岡駅南口から徒歩３分

◎ホビーに関する講演会 ＆ 見学ツアー

静岡市は「ホビーのまち」として知られ、ものづくりが盛んな地域です。地場産業であるプラモデルの生産量は日本の９割、世界の５割を占め、世界一と言われています。静岡市は毎年、世界最大のホビーの祭典として知られる「静岡ホビーショー」、「トレインフェスタ」、「クリスマスフェスタ」など、模型・ホビーに関する様々なイベントを催し、国内外に街の魅力を発信しています。

アートやものづくりによる教育活動で大切なことは、多くの素敵なモノ・コト・ヒトに触れ合う中で、子どもたちが創造性や感性を豊かにし、夢を描いて未来に向かって生きていく、その希望や勇気を与えることです。夢と感動を与える最新のモノづくりや「ホビーのまち」の魅力を感じて頂ければと、ホビーに関する講演会＆見学ツアーを企画しました。

**〇ホビーの講演会＆見学**

**ホビーのまち静岡「世界中に夢と感動を！」**

〈講演会〉
演題：「“MADE IN JAPAN”にこだわり抜いたモノづくり」
講師：佐々木克彦氏（バンダイ ホビー事業部 チーフマイスター）
バンダイホビー事業部 各担当者

〈見学ツアー〉
★会 場：静岡ホビースクエア

〇日程

**第１日目　平成２９年３月２８日（火）**

9:00　受付
9:40　研究発表Ⅰ
11:55　昼休み
12:50　研究発表Ⅱ
14:20　開会式
14:30　講演会
17:00　静岡ホビースクエアの見学
18:30　懇親会（ホテルアソシア静岡　3F 駿府）

## 第２日目　平成２９年３月２９日（水）

9:00　受付
9:30　研究発表Ⅲ（三学会研究交流会）
11:55　総会
12:45　昼休み
13:10　研究発表Ⅳ
14:55　研究部会交流会　※16:55 終了

### ◎三学会連携行事（造形芸術教育協議会企画）

造形美術教育の理論研究を通してその振興を図ることを目的として、「日本美術教育学会」「大学美術教育学会」「美術科教育学会」の三学会によって、2009 年度に結成されたのが「造形芸術教育協議会」です。年に数回、三学会の代表者等が集まり、連携の具体的課題を協議し、現在まで、それぞれの大会への相互参加の活性化や情報交換、共通の課題に関するシンポの開催や共催などを進めています。

平成 27 年 3 月 8 日（日）、造形芸術教育協議会の企画によるシンポジウムを静岡市で開催しました。「教育課程改訂に向けて美術教育研究は何を提起できるのか？」をテーマに、三学会が共同で討議を行い、多様な側面からの意見を交換しました。

**第 39 回美術科教育学会静岡大会における三学会連携事業として、この静岡で開催した「造形芸術教育協議会・シンポジウム」につながる「三学会研究発表交流会」を企画しました。**それぞれの学会より、多くの研究者に発表して頂く予定ですが、次期教育課程改訂に向けて、「美術教育研究の立場から何を提起できるか」について、こうしたテーマに向き合った研究発表の場を実現したいと考えております。

### ◎世界文化遺産鑑賞コーナー

世界文化遺産に登録された富士山をより美しく鑑賞して頂くための特別コーナーを設置します。静岡の街並みと共に、ぜひ、世界文化遺産となった富士山の魅力を楽しんでください。

☆世界遺産の三保の松原から眺める富士山

### ◎学会参加費

| 参加費 | 事前申込 | 当日申込 |
|---|---|---|
| 正会員 | 4,500 円 | 5,000 円 |
| 非会員（大学院生を除く） | 5,500 円 | 6,000 円 |
| 大学院生（社会人を除く、正会員を含む） | 2,500 円 | 3,000 円 |

### ◎懇親会費

| 参加費 | 事前申込 | 当日申込 |
|---|---|---|
| 正会員・非会員 | 5,500 円 | 6,000 円 |
| 大学院生 | 3,800 円 | 4,500 円 |

※「大学美術教育学会」又は「日本美術教育学会」の会員の場合も本学会会員と同様に、正会員の料金で参加できます。
※懇親会の料理を用意する都合上、**できるだけ事前申込みにご協力をください。**

◆発表資格

発表は、本学会会員（申込み時点で、当該年度までの会費を完納していること）に限ります。共同研究の場合は、筆頭発表者が会員であり、かつ会員でない者が発表者の半数を超えないことになっています。

詳細は、学会 HP（http://www.artedu.jp/）の「美術科教育学会 大会発表規則 第３章」を参照のこと。

なお、「三学会研究発表交流会」での発表者は各自が所属する学会の発表資格に準じます。

◆発表時間

30 分（発表 20 分、質疑 10 分）
＊発表の日時、会場については、ホームページでお知らせします。（２月中旬頃）

◆使用機器

発表に使用するパソコンは各自持ち込んでください。
＊プロジェクターへの接続は、基本的に VGA（D-Sub）対応です。
＊Mac、iPad 等の接続 VGA 変換アダプターが必要ですので、各自ご持参ください。
＊HDMI の接続の場合には、VGA 変換のアダプターをご持参いただくか、事前にご相談ください。
＊動画等で音声を流す場合には、スピーカーにつなげますので、事前にご相談ください。

◆年会費の納入

今年度までの年会費未納では発表できませんので必ず納入してください。会費納入状況は以下からログインし、確認することができます。
（https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/AAE）

■参加登録・発表申込

事前参加申込み、研究発表を希望される方は、下記の要領をご確認頂き、**第 39 回美術科教育学会静岡大会のホームページ**（http://artedu-shizuoka.com/）**より、「オンライン大会登録受付システム」（https://www.e-naf.jp/meeting/ENAF/artedu39/member/）からお申込みください。**

**事前参加登録・演題登録の開始は 2016 年 11 月 1 日（火）**になります。

※登録後、「参加登録受付メール」または「演題登録受付メール」が届きますのでご確認ください。

※「発表概要投稿用テンプレート」（Microsoft ワード文書）は静岡大会 HP よりダウンロードし、完成しましたら、オンライン大会登録受付システムより、2017 年 1 月 18 日までにご投稿願います。

※発表要項は、静岡大会 HP に掲載します。

※入金締切日までにご入金いただけない場合、事前参加登録は自動的にキャンセルされます。

■申込方法

静岡大会の発表申込及び事前参加申込については、「オンライン大会登録受付システム」を使って行いますが、参加申込については当日でも可能です。

■申込締切

**2017 年 1 月 18 日（水）**
**演題登録及び抄録原稿　締切**

**2017 年 2 月 28 日（火）**
**事前参加登録及び参加費　締切**

**申込期限・時間を過ぎるとオンラインシステムで登録は出来なくなります。余裕をもって、期限までに登録してください。不明な点があれば、大会システムサポートデスクまで、電話・メールにてご相談ください。**

■オンライン登録システムに関する問い合わせ

中西印刷株式会社　Tel: 075-415-3661
E-mail: artedu39@nacos.com
第 39 回美術科教育学会静岡大会
大会システムサポートデスク
（参加申込・発表申込・概要集）

■大会に関する問い合わせ

第 39 回美術科教育学会静岡大会実行委員会
（事務局長）　芳賀正之
Tel: 054-237-9540（美術科資料室）
E-mail: info@artedu-shizuoka.com

〈宿泊等関するお願い〉

静岡市では全国規模の各種大会の誘致を促進して観光客の増加を図っており、大会主催者に対して「全国大会開催事業補助金」が交付されています。大会実行委員会では、この補助金を申請中ですが、静岡市内のホテル、旅館等への宿泊者を合計した数が 100 人（100 泊）以上となることが条件となっております。

そこで、会場で配布する用紙（宿泊実績数調査票）に、宿泊施設名、お名前、宿泊日数をご記入の上、宿泊施設のフロントにご提出ください。また、この用紙は大会専用の HP よりダウンロードできます。

静岡市内には、数多くのホテル・旅館等がありますが、JR 静岡駅周辺のホテル等をホームページで紹介しておりますのでご覧ください。

なお、静岡大会では、託児施設を設けておりません。

大会運営にご理解、ご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

〈会場までのアクセス〉

**★静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」**

（〒422-8005　静岡県静岡市駿河区池田 79-4）

□JR の場合

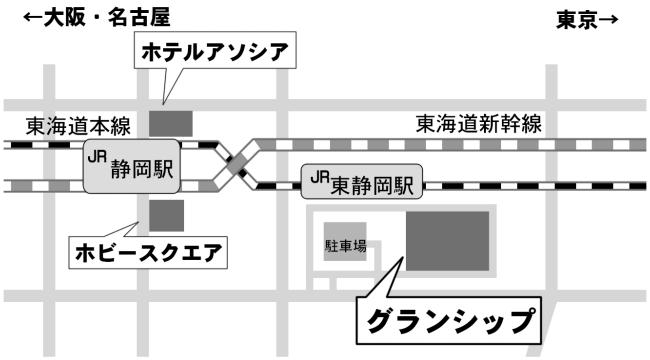
①東海道新幹線（ひかり）
東京から 1 時間／新大阪から 2 時間、静岡駅下車
②東海道本線　上り方面に乗換、東静岡駅まで約 3 分
③東静岡駅南口からメインエントランスまで徒歩 3 分

□車での場合

＊東名高速道路　静岡 I.C.から 6km 、車で約 20 分
＊新東名高速道路　新静岡 I.C.から 9km 、車で約 15 分

**★ホテルアソシア静岡（懇親会会場）**

JR 静岡駅（北口）から徒歩 1 分
（〒420-0851　静岡県静岡市葵区黒金町 56 番地）



# 理事会報告

本部事務局　相田隆司(東京学芸大学)

2016 年度第 1 回理事会は、2016 年 9 月 4 日（日）13 時より 17 時 30 分まで聖心女子大学 2 号館 4 階ワークショップルームにて開催された。最初に水島代表理事の挨拶があり、続いて相田副代表理事進行で議事が進められた。出席した理事、監事は合計 19 名、公務等で欠席の 4 名からは委任状の提出があり、理事会成立条件が満たされていることが確認された。

【報告事項】

Ⅰ　総務部関連

1. 本部事務局の分担体制について

水島代表理事より第 8 期の本部事務局の体制ならびに研究部、事業部の体制と、特に倫理規定検討担当をおいたことについて報告がなされた。

2. 会費納入状況・会費減額措置の申請状況について

西村理事より、資料に基づき現在の会費納入状況と大学院生等の減額申請（承認済み）状況について報告がなされた。

3. J-STAGE　について

上山理事より、ELS の廃止に伴う J-STAGE への学会誌掲載に向けた審査手続きの概要について、また、J-STAGE 移行後の新規の学会誌の登載は平成 29 年度からとなる予定である旨の報告がなされた。

4.　美術教育連絡協議会

水島代表理事より、美術教育連絡協議会（8 団体）による提言書作成の進捗状況等について報告がなされた。

5. その他　なし

Ⅱ　研究部関連

1.『美術教育学』第 38 号の投稿状況，査読・編集日程

直江副代表理事より資料に基づき『美術教育学』第 38 号への投稿数，今後の日程、査読依頼等につき報告がなされた。

2. 研究部会活性化について

永守理事より、学会 40 周年を迎えるにあたり，また引き続き学会における研究の活性化の必要性に鑑み、授業研究部会の研究成果を皮切りとする学会叢書（仮称）の発行を検討している旨の報告があり、この研究内容に関連して水島代表理事より 3 学会連携しての事典作成に向けた検討の進捗状況について紹介があった。

3. その他　なし

Ⅲ 事業部関連

1. 実施済みリサーチフォーラムの報告と実施予定のテーマについて

山木副代表理事より、2016 年度前半期に実施済み、今後実施予定のリサーチフォーラムについて報告がなされた。

2. リサーチフォーラムの実施上の留意点および注意事項について

山木副代表理事より、研究成果の公開という趣旨に鑑みた補助金の使途等に関するリサーチフォーラムの実施上の留意点および注意事項について資料に基づく報告があった。原則として飲食についての補助を行わないとする項目について若干の意見のやりとりがあったが、研究補助の趣旨および現代の動向を踏まえ、この点についても、実施上の留意点および注意事項に含

み、学会ホームページなどに掲載するということである。
3. 芸術関連学会連合のシンポの開催について
長田理事より、資料に基づき実施済みの芸術学関連学会連合第11回公開シンポジウム（2016.6.11開催）について報告があった。また、芸術学関連学会で話題となった今後の東京オリンピックに関連づけたイベント等開催の可能性について当学会でも議論の俎上にのせてみてはとの提案があった。

【審議事項】
Ⅰ　総務部関連
1.第38回美術科教育学会大阪大会の収支決算報告
相田副代表理事より、第38回美術科教育学会大阪大会の収支決算報告がなされた。審議の結果、原案通り承認された。
2. 第39回静岡大会の実施計画案について
伊藤文彦大会実行委員長より、第39回静岡大会の実施計画案について説明がなされた。(2017年3月28日（火）：大会第1日、3月29日（水）：大会第2日）審議の結果、原案通り承認された。
3. 平成29（2018）年度から平成31（2020）年度までの大会開催大学の予定
水島代表理事より、今後の大会開催大学についての見通しについて説明・提案がされ、審議の結果承認された。
4. 新入会員及び退会者の承認について
西村理事より資料に基づき今年3月の理事会以降、8月24日（水）までに受理された入会申し込み者11名（再入会者1名を含む)について説明・提案がなされ、審議の結果入会が承認された。続いて資料に基づき、退会者9名について説明・提案がなされ、審議の結果退会が承認された。
5. 学会名英文の検討について
水島代表理事より、学会名の英文の検討に関する提案があり、今後継続して検討を行ったうえで審議することで承認された。
6.　学会創立40周年記念行事について
水島代表理事より、学会発足40周年（2018年）に向けた、美術科教育学会四十年史編纂委員会の設置を検討することについて提案があり、承認された。
7. 学会通信について
西村理事より、今後の学会通信にリサーチフォーラム等関連する研究会等の告知チラシがあれば同封することについて提案があり、係る費用軽減のための検討を併せて行うことで承認された。
8. 公式ウェッブサイト
大泉理事より、資料に基づき美術科教育学会Webサイト、一斉配信メール、学会通信等、本部事務局が主管するメディアに関する業務の現状について報告があり、今後本部事務局で検討すべき内容について提案があった。内容はWebサイトの更新に利するための管理・運営・更新権限の拡大の可能性、研究部会へのWeb担当者の配置の可能性、学会通信電子化の可能性等についてである。審議の結果、本部事務局でさらに検討を行い次期理事会にて審議を行うことが確認された。
9.　その他　なし

Ⅱ　研究部関連
1. 第14回『美術教育学』賞選考委員について
水島代表理事より『美術教育学』賞選考委員長を、奥村理事に委嘱することについて説明・提案がなされ、審議の結果、承認された。また直江副理事より4名の選考委員について理事、会員の中から推薦することについての確認がなされた。
2. 倫理綱領の策定と周知について
水島代表理事より、学会における倫理綱領策定と倫理規定検討担当者の必要性について説明があったのち、新関理事より資料に基づき、美術科教育学会研究倫理綱領案、ならびにそれをガイドブック等書籍化する案について説明・提案があり、審議の結果、承認された。今後、新関理事を中心に検討を進め、次期理事会にて審議を行うことで確認された。
3.　美術科教育学会叢書について
水島代表理事より、叢書を刊行することにつき、案が資料に基づき提案され、概要、対象、体裁、予算、発行部数・発行回数及び時期、刊行スケジュールなどが示された。加えて、永守理事より、研究部における検討の経緯と学会におけるその意義、授業研究部会の成果を叢書化することの意義、次期理事会に向けた検討内容の3点について説明があった。また、大泉理事より資料に基づき、授業研究部会における検討内容について説明があった。審議の結果、提案が承認され、今後は水島代表理事を中心にさらに検討を行うことが確認された。
4. その他
・学会誌編集規則の改正について
直江副代表理事より、資料に基づき「美術教育学」への投稿論文の採否を審査する査読者の氏名について、当該号の発行時に査読者の氏名一覧を査読委員として公表することと、上記に係る学会誌編集規則の改正案につき説明・提案があり、審議の結果、承認された。

Ⅲ 事業部関連
1. 事業部運営方針について
山木副代表理事より、資料に基づき従来の「地区会・リサーチフォーラム」と２つの名称がやや恣意的に使われていた点を改め、「リサーチフォーラム」の名称に一本化にするとの提案があり、そのメリットおよび企画者の希望などを踏まえ、審議の結果、承認された。また、これに伴い学会の本則と細則における名称の統一に向けた改定案作成に着手することついて提案があり、審議の結果、このことについて承認された。
2. リサーチフォーラムの運営について
山木副代表理事より、リサーチフォーラムのプランが不足する場合への対応について説明・提案があり、審議の結果、これまで以上にリサーチフォーラムの趣旨や申請方法を会員に周知するとともに、不足する場合には、適宜、事業部代表の副代表理事を中心に各理事が会員に働きかけ、実施を促す対応を行うことが承認された。
3. プレ学会の位置づけについて
山木副代表理事より、事業部事業として位置づけられているプレ学会の位置づけについて検討すべきとの提案があり、今後、理事間で検討する方向が承認された。
Ⅳ　その他
新井監事より、理事会への出席者につき検討の依頼があり、審議の結果、本部事務局で検討を行うことで了承された。

2016年度　美術科教育学会リサーチフォーラム in 東京　2016.5.21報告

# 転換期日本の美術：「アートする力」とは何か－その未来への可能性を探して

谷口幹也（九州女子大学）

開 催 日：2016年５月21日（土）13：00〜17：00
場　　所：東京工業大学 キャンパス・イノベーションセンター４階ラウンジ
企画運営：現代〈A/E〉部会

## １．企画趣旨

文化、教育、産業、さまざまな局面において転換期にある日本。その中で、アートがなしうる力とは何か。本リサーチフォーラムでは、世界各地のクリエイティブシーンに注目し、『キッズサバイバル』『アートという戦場』などの本を編集し、近年、表現教育プロジェクトを推進している津田広志氏（フィルムアート社取締役・青山学院大学客員教授）をお招きし、「アートする力」をめぐってシンポジウムを開催した。

## ２．基調報告　　３つの「アートする力」
—— 無限へ、無意識に、越境的に。　津田広志

### ■ 問題の所在

津田広志氏（以下敬称略）は現在、多様な形で行なわれているアート、美術館教育等の活況に触れた上で、何でもアート、誰でもアーティストといったアートバブルともいえる希薄さが、今日、問われているのではないかと問いかけた。そしてその反証ともいえる事例が、グローバル世界の中で、非常に不気味な動きとして登場し、それに対して我々が十分対応出来ていないという事態がある、と問題を提起した。津田は冒頭、非常に印象的な指摘を行った。それは「アートの手法を使って現実を破壊する」という今日の事態である。具体的に、ISのスナッフムービー(Snuff movie)を取り上げ、実際の殺人をビデオカメラで撮るという映像を見ると一番驚くのは、映画史に残る著名なシーンを連想させることである。セルゲイ・エイゼンシュタインの『メキシコ万歳』(1931-1979未完成)とミケランジェロ・アントニオーニの『砂丘』(1970)等の引用を連想させるのである。アートの映像を現実の世界に使いながら、アートを使って現実を非常に大きな力で破壊していくというようなことになると、アートの悪用が問題とならざるを得ない、と津田は指摘した。

またアッサンブラージュを用い、価値のあるものとないものを寄せ集めノイズを発生させ、経済市場を膨張させ転覆させる可能性を含んだ金融工学的な商品が生まれた。実際に世界規模で80兆円もの損失を招いたリーマンショックのように、アートの手法は、デザインの場だけではなく、経済活動、経営学の中でも使われている。それを津田は非常に危険視していると述べた。また津田は、アメリカのリチャード・フロリダの『クリエイティブ資本論』(2002)を取り上げ、今日のアートをめぐる状況から創造都市という形で、クリエイティブ・クラスが世界の主導権を握り、創造的なものを世界の中に作っていくというストーリーを紹介した。特に、彼のTolerance／寛容性の重要性は支持した。以上のように、津田は、今日の世界、現状のアートの闇と光の部分を指摘した上で、歴史的読みから、アートを再構成し、以下、３つの「アートする力」として、「吐き出す力」、「ひざまづく力」、「かろうじてまとめる力」を提案した。

### ■ 近代 ／ 吐き出す力

津田は、近代の力を「吐き出す力」と述べる。津田はセザンヌを紹介し、近代とは、自分の思ったことを吐き出すようにして表現していくことであると述べた。この吐き出しの力というものは、非常に重要であり、「吐く」というパフォーマティブなことは、単にただ「吐き出す力」と言っても弱い。本当に吐き出すということは「嘔吐する」ことであり、それだけの激しい力を持っている。印象主義的な吐き出し方、あるいは表現主義的な、自分の内面まで含めて吐き出すような吐き出し方といろいろある。またその吐き出す力は、人間の深い潜在的な無意識のところまで吐き出す試みになる。この吐き出しの力の究極的な宣言は何かというと、1924年、フランスでアンドレ・ブルトンが出した「シュルレアリスム宣言」である。この宣言をしっかりと読み取るならば、アートが現実の中で破壊的に使われるということはありうることがわかる。また、これは、個性的であれと言われながらなかなか個性が出ないという、先進国各国でみられるアイデンティティーの問題とも関連している。いずれにしても、この近代の吐き出す力が極限まで達したのが、今日なのではないか、と津田は述べた。

■ 古代・中世 ／ ひざまづく力

近代より前の古代や中世ではどうだったかといえば、ヨーロッパではキリスト教の教会などを中心にしたアーキテクチャの中に様々なアートの要素が組み込まれていた。天井の壁画だとか、荘厳な崇高性を感じさせるようなものを配置し、秩序と調和がある。この境地の中で、人は一つの無限的なものと向かい合う重要な契機がある。これは、宗教美学の問題として非常に重要な問題を秘めている。ただし、この古代・中世は、教会や寺院を使いながら何が目的だったかといえば国家の統治である。国家をいかに安定して統治させるかというガバナンスの為にやるのだから、言葉として、津田は「ひざまづく力」であると述べた。近代が「吐き出す力」だとすると、古代や中世というのは、人をある無限なもの、神とかあるいは神を超えるような何かにひざまづいていく。古代・中世はひざまづく力によって、逆に言えば、ひざまづかせる力で、統治して従属させる意味、その力があった。

■ 現代 ／ かろうじてまとめる力

現代は近代の延長にあり、日本も戦後、近代の超克、ポストモダニズムといったいろんな言葉は出てきたが、近代そのものはまだ超えたとはいえない、と津田は述べる。そして現代における「アートする力」は、「かろうじてまとめる力」だと述べた。今、グローバル化の中でネット上の情報も瞬時にグローバルに流れるが、人間もこれから流れ移動していく。越境性がより強くなり、次々にいろんなものと接続してくる事態になっていく。それはジェンダー、国籍を越え、様々な場の境界を越えていく非常に大きな動きになる。これが一体何なのかを私たちは考えないといけない。そこで津田は「かろうじてまとめる力」を考える際のサンプルとして若冲を紹介した。津田は、若冲を、多様性を認めながらいわゆる削っていくのではなく足し算の世界でも統御しながら生きていくことはできるという、まさにグローバル化の中でお手本のような人ではないかと述べた。若冲の絵は、デジタルのドットのような世界を創出し、躍動感とユーモア、多様性がうまく制御され、技法的にも非常に優れたものである。若冲の持っている「まとめる力」。この力には高度なものの見方、捉え方が必要であると述べた。

■ 体験から経験へ

津田は、報告の最後に、非常に重要なのが「経験」であると述べた。今日、参加型アートなどにおいて体験するということが強調されている。しかし、体験と経験は非常に似ているが、これは全く別の言葉と考えてもいい。哲学者・森有正(1911-1976)を紹介し津田は、経験とは自生的なものではなくて、突然変貌するものである。そして突然変貌することによって、自分が全く変わってしまうようなことなのだ、と述べた。津田は、実は美術教育も、体験だけでは駄目で、無意識や越境性や無限性というものをよくふまえ、突然人間が理性を越えて変化するのだということを考えるようなものが装置としてあればいい、と提言をした。(要約・文責：谷口)

## ３．シンポジウム

津田の基調報告を受けて、長田謙一氏（名古屋芸術大学）は現代の社会、人間、アートの問題を歴史的視点と人間学的視点を交差させることによって浮かび上がらせ、神野真吾氏（千葉大学）は、アイデンティティーと表現をめぐる現代の事例を多数示し、議論に具体性を与え、現代の表現をめぐる問題を明確にした。なかでも神野が示した女子高校生の作品は、津田が提示した「吐き出す力」の現代における意味と、「かろうじてまとめる力」の日本の現状とその課題を明示するものであった。そして本報告者は、津田が示した提言を美術教育学から検証し更新することが必要であると述べた。そして来場者との応答から、アートの現場が持つ切実な想いと考え行動することの重要性が浮上した。(本フォーラム・シンポジウムの詳細を、後日公開予定。)

## ４．総括

非常にスリリングな基調報告とシンポジウムであった。津田が問題を提起したように、近年、私たちを取り巻く社会は大きく変わっている。ポストモダン的状況を経てアートの現場は、移民や難民の動きを通して、多文化の世界規模のディアスポラの変遷と発展により更新され、美的かつ文化的な問題は広大なものとなっている。我々が美術教育学の立場からすべての人間にとって必要となる今日的な力を「アートする力」と措定するならばその力とは何かを歴史的観点から示す必要がある。本リサーチフォーラムの成果は、この視点の構築に向けて重要な一歩を踏み出したことにつきる。

しかし、やみくもに「アートする力」を唱えても現実は変わらない。私たちは、歴史的検証と共に現在を見据え考えることによって、普遍的視点を、様々な知見を交差させることによって構築する必要がある。津田の提言を我々は真摯に受け止めねばならない。「吐き出す力」、これは近代を推進し現代を導き基礎となった大きな力である。「ひざまづく力」、それは崇高性や秩序を求め無限へ向かっていく。「かろうじてまとめる力」、それは境界を越える大きな力となる。現代の「アートする力」は、津田の提言通り更新されていくだろう。しかしこの力を専門家の世界に留めていてはいけない。我々には、一部のクリエイティブ・クラスの人々を称揚するのではなく、すべて人々にとっての「アートする力」を考え、示す役割がある。津田の報告はとても重要なものであった。なぜ津田が、美術科教育学会のリサーチフォーラムに登壇したのかを改めて考える必要がある。より開かれ、境界を超える場へ。それが津田のメッセージであったのではないだろうか。津田の提言に感謝の気持ちでいっぱいだ。

2016 年度 美術科教育学会 リサーチフォーラム in Osaka, Japan　2016.7.30 報告

# ドイツの初等教育における「アート・プロジェクト教育実践」から探る美術教育の新たな<かたち>

–マリオ・ウアラス教授(ドイツ・ハイデルベルグ教育大学)のプロジェクト型美術教育をふまえて–

主催　美術科教育学会・兵庫教育大学　於：大阪教育大学 天王寺キャンパス 西館ホール

コーディネーター　宇田秀士（奈良教育大学）

2016 年 7 月 30 日(土)に午後 13:00-18:00 の時間帯で，標記のリサーチフォーラムを開催しました。

フォーラムの中核に据えた講演のドイツ・ハイデルベルク教育大学のマリオ・ウアラス(Mario Urlaß)氏は，2007 年 7 月の「InSEA 欧州地区会議 in ハイデルベルク」に参加された福本謹一氏(兵庫教育大学)がスカウトし，「第 32 回 InSEA(国際美術教育学会)世界大会 2008 in 大阪」で宇田がコーディネーターを務めたセミナーに招待しました[1]。

ウアラス氏は最終的にはライプティヒ大学で学ばれ，現大学では芸術及び芸術教授学を担当されています。中心的な研究テーマは，「基礎学校(小学校)における芸術的人間形成」「自然と関わる芸術教育学」であり，「現代芸術，絵画・オブジェ・インスタレーションの領域での芸術的活動」も行っています[2]。

2010 年に宇田がハイデルベルクを訪問するなどの交流を続け，今回は兵教育大学の福本氏の尽力により同大学国際交流協定による招待で来日が実現しました。また，本学会事業部の支援も得て，会場費，講演者・ドイツ語通訳者謝金などに充てさせていただきました。

当日は，夏の各種研修やオープンキャンパスなどと日程が重なる中，全国各地からお集まりいただき，韓国からの参加者も含め，あわせて 65 名で長時間の講演・討議をもちました。

第 32 回 InSEA 世界大会 2008 in 大阪の様子を説明する宇田

永守 基樹前代表理事(和歌山大学)の挨拶の後，宇田が，当日配布『概要集』全 55 頁を基に，企画の趣旨・登壇者紹介・進行説明の後，「2008 InSEA でのウアラス氏のロフト・プロジェクトの事例と日本の「造形遊び」との比較」を約 20 分間報告しました。なお，氏のプロジェクト実践は次の URL から見ることができます[3]。

その後，ウアラス氏による講演「ドイツの初等教育における「アート・プロジェクト教育実践」の可能性について–「工事現場」プロジェクト」がありました。松坂千也子氏によるドイツ語逐次通訳を随時入れましたので，約70分間(13:25-14:35)の講演でした。

ウアラス氏は大学で教える傍ら，昨年9月から毎週月曜日午後，ハイデルベルク近郊のヴィースロッホのメリアン基礎学校１年クラスを教えています。そして，本年5月に開始した「工事現場」プロジェクトでは，22人のクラスに90分の授業を毎回行ってきました。

講演中のマリオ・ウアラス氏

その目的は，「独自性と自己構築能力を持つ子どもを中心に据えた芸術志向であるドイツの教授法理論」を学校での現実の授業で実現することでした。氏がこれまでのプロジェクトも含めて長年行ってきたことは，小学校における芸術教育の理念が持つ可能性と限界を探ることで，子どもたちの感性の鋭敏化，批判的な省察，想像力，文脈性，変容，などを重視してきました。

また，「誘導された学習–自己責任の学習」「開放–統制」「真実–想像」「緩やかな思考–厳格な思考」などの軸での「振幅」を大切にしています。すなわち，何れかに偏らずに両方の要素を自然に入れていく方法です。さらに，プロジェクトの基本的な特徴は，「数カ月にわたり少しずつ発展していくテーマ」「プロセス重視，実践重視の受容・制作，それらの省察」「遊戯的・実験的な学習」「領域横断性」「テーマや子どもに対しての多様な見方」「写真，インスタレーションなど表現方法の多様性」が内包されていることといえます。

これに基づいたプロジェクトでは，子どもの学習と隣り合わせで行われる学校の改築工事に出会い，これをテーマにしました。工事現場を見ながら設計図を想

1）http://www.art.hyogo-u.ac.jp/fukumo/InSEAinJapan/photoinsea/PhotoGallery.html
2）http://www.mario-urlass.de/
3）https://www.ph-heidelberg.de/kunst/personen/hauptamtlich-lehrende/biographie-prof-mario-urlass/urlass-downloads.html

像して描くことから始まり，現場の専門家の説明の場，現場での見学と道具の体験，ジオラマのようなミニ空間の創造，現場の泥を混ぜての描画活動，インスタレーション活動，それらの発表と省察と続きました。

また，各活動の後で，次のような関連する芸術家の作品・活動の鑑賞活動があることも特徴的でした。日本では金沢21世紀美術館の常設展示「スイミングプール」で知られるアルゼンチンのレアンドロ・エルリッヒ(Leandro Erlich 1973−　)，アンフォルメに触発されたスペインのアントニ・タピエス（Antoni Tàpies 1923−2012)，英国のスリンカチュ(Slinkachu)の作品集(北川玲訳『こびとの住む街1』創元社,2013)などがそれでしたが，実際の子どもの主体的な活動を見ての鑑賞作品の選択が絶妙だったと感じました。

フロアーからの質問

その後，約35分間(14：35−15：10)の「質問と対話」を行い，指定質問者の岡田 陽子氏(大阪千代田短期大学・元大阪府小学校長)と辻 大地氏(こどもアートスタジオ)，フロアーの山口 三佐子氏(大阪府豊中市立豊島小学校)から，それぞれ質問がありました。この対話の中で，ドイツでも芸術の本質を追究した授業は必ずしも多くはなく，ウアラス氏は，基礎学校の教師や保護者会でアピールするなどして、それらの現状に対して懸命な努力を続けていることなどが分かりました。

15分間の休憩を挟み，後半の「シンポジウム」(15:25−17:55)を行いました。福本 謹一氏(兵庫教育大学)「プロジェクト学習・課題解決学習における美術の分野の可能性から」，湯川 雅紀氏(関西福祉科学大学)「ドイツの学校教育で実践されている美術の題材やカリキュラムについて−ドイツ・デュッセルドルフでの生活・芸術体験から」，鈴木 幹雄氏(神戸大学)「芸術教育の「フレクシブルな実践」と教員養成を支えるもの−ドイツ芸術教育学が遺した遺産を再省察する」と，それぞれの立場からの現状認識が語られ，続いてウアラス氏との対話がありました。「<つくること>と身体の思考」の立場からの対話を予定していた佐藤 賢司氏(大阪教育大学)は，重要会議のため急遽欠席となったため，事後に刊行予定の『フォーラム記録集』に感想を寄せていただくことにしました。

また，フロアーからは，宮崎 浩氏(西宮市仁川学院小学校)，森 芳功氏(徳島県立近代美術館)，羽太 広海氏(奈良学園大学)から，それぞれ質問があり，それを基にした対話が行われました。

これらシンポジストやフロアーとの対話を通じて次のようなことを感じました。

1，芸術大国とも言えるドイツであるが，理論と実践の間には，やはりミッシングリンク(Missing-link失われた環/鎖)があり，この接続をしようとするウアラス氏の奮闘

2，ドイツは連邦制であり，中央集権的な我が国のように一概には言えないが，日本で言う総合的な学習の伝統があり，選択科目である「分科学習 Differenzierungskurse」では教科や領域を横断した学びがあり，これに芸術活動も絡んでいること

3，「社会彫刻(Soziale Plastik)」「誰でも芸術家である Jeder Mensch ist ein Kuenstler」などのヨーゼフ・ボイス(Joseph Beuys 独 1921-1986)の主張や「生きる術としての芸術 Lebenskunst」がウアラス実践に大きな刺激を与えていること

言葉の壁もあり，運営は決して容易くはなかったのですが，発言者それぞれの今後の実践に向けての必死な姿が見てとれ，励まされました。

質問に答えるウアラス氏と通訳の松坂氏

また，当日のテープ起こし記録を何度か読みかえすうちに芸術活動の可能性を信じるウアラス氏の教育実践の全体像が見え出してきました。この機を逃さず今後の研究・実践に繋げたいと考えています。

なお，本年末に学会HP http://www.artedu.jp でのフォーラム記録PDFの掲載を予定しています。ご覧いただき，御意見・御指導をいただけば幸いです。

登壇者が揃ってのシンポジウムの様子

研究ノート　工作・工芸領域研究部会から

# リトアニアにおける展覧会“KAS YRA PLUOŠTAI？”報告

佐藤賢司（大阪教育大学）

筆者は，2016 年 7 月 8 日から 9 月 10 日まで，リトアニアにある Janina Monkute-Marks MUSEUM GALLARY で開催された展覧会『Tarptautinē paroda “KAS YRA PLUOŠTAI?”（International Exhibition “What is Fiber?”）』に出品し，会期中現地にてワークショップを実施した。本稿ではこの活動について簡単に報告したい。

Janina Monkute-Marks MUSEUM*GALLARY はリトアニアの内陸にある都市 Kėdainiai（＝ケダイネイ）にある美術館である。リトアニア出身の女性アーティストでアメリカに移住後も様々な活動でリトアニア文化の普及と発展のために活躍した Janina Monkute-Marks を記念し，その作品を収蔵している。

開館は 2001 年で，美術館の設立目的は「Kultūrinis ir edukacinis įsipareigojimas: dalintis su žmonėmis meno gyvenimu, rengti simpoziumus, paskaitas, literatūros vakarus, muzikinius koncertus Pristatyti kūrybos dinamiką ir įvairovę, dalyvauti šalies ir Kėdainių kultūriniame gyvenime.（文化と教育のコミットメント: 生活の芸術を人々と共有するシンポジウム・講演会・文学の夕べ・創造的ダイナミクスとケダイネイの文化生活に寄与する多様性を提供するコンサートなどを開催すること）」とある[1]。歴史的な建物は，戦時中は公証人役場として使われたものをリノベーションしたものだ。

Janina Monkute-Marks MUSEUM　GALLARY

同館は，テキスタイル・ファイバーアートに大きな関心を持ち，これまで重点的に企画展を開催してきた。日本の作家を紹介した企画には『Small Size Works Fiber Art from ASIA and EUROPE』（2012）などがある。

『Tarptautinē paroda “KAS YRA PLUOŠTAI？”』は同館の企画で，館所属キュレーターだけでなく，国際的に活躍する日本人作家の石井香久子氏がゲストキュレーターとして参画し作家選択などを行った。作家はアジア・ヨーロッパ・アメリカから 66 名，リトアニアから 10 名の 76 名で，作品 114 点が展示された。

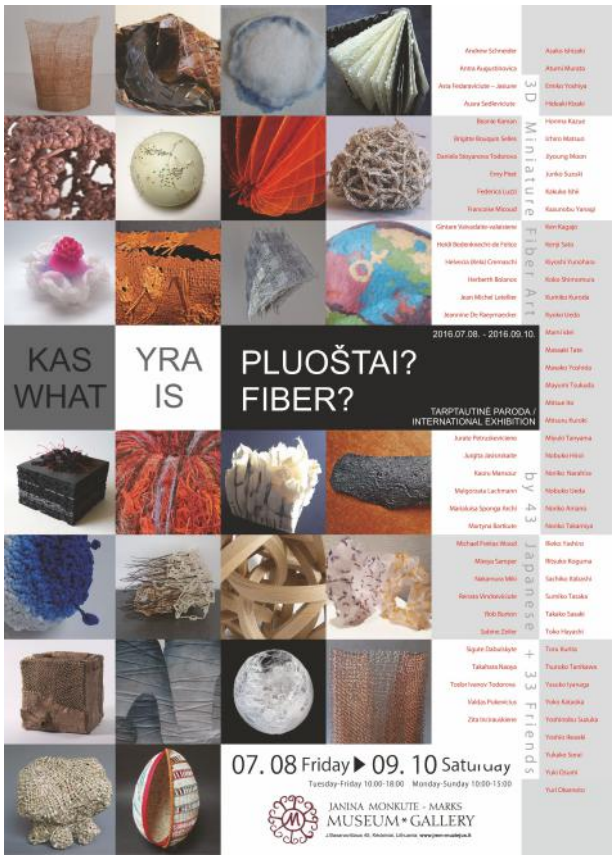
オープニングにはアーティストの他，ケダイネイ市長や多くのゲスト・美術館サポーターが訪れ，大変盛会であった

Opening Reception

出品作品の多くは，糸や布などの繊維素材を用いた造形作品で，展覧会のテーマである「ファイバーとは何か？」に作家それぞれの視点で応えたものである[2]。

Gintare Vaivadaite-valasiene

作品の方向性は多様であり，素材の特性を主張したものや，心象的なテーマに基づいたものなど，決して一様ではない。しかしながら，前出石井氏の作家選択と，美術館のキュレーター，Aušra SEDLEVIČIŪTĖ の優れた展示により，統一感ある空間となった。




Poster

Kenji SATO「Name of People」

筆者はこの展覧会に，作品「Name of People」を出品した。これは2011年3月11日以降の新聞に連日掲載された人名（享年付）を半透明の紙に転写し，細く切ってシリンダー状に編んだものである。素材感の主張よりも，人名（人命）という非常に重い情報を掲載・保存するメディアとしての紙の意味を，裁断・再構成という方法を通して考えたものである[3)]。

ワークショップでは墨の表現からはじめて，団扇を制作するというプログラムを実施した。筆者がこの数年間モノクロームの作品だけを制作していることから，墨というメディアを選んだが，さらにコントロールしきれない滲みや広がりと，和紙の素材感を通して，工芸的な造形の表現過程（＝主題先行ではなく素材と行為から生まれる思考）を提案したいと考えてのことだった。ワークショップ会場は，展覧会の出品アーティストの他，地元の美術館サポーターで満席であった。

筆者はこれまで幾度かアジアやヨーロッパの国々で展覧会に参加する機会に恵まれたが，交流を通して異文化と触れ，自身の作品とその根拠とする文化の属性を，改めてカッコに入れて捉えなおすことは，新たな未来のステージの美術教育を構想する上で大いに意味を持つものと考えている。

また，陶芸家河井寛次郎の言葉に「手で考え足で思う」というものがあるが，まさに身体で意味を生成し，世界を捉える，＜方法としての工芸[4)]＞は，個に根差した多様性が生きる将来の美術教育を構想する時の，一つの重要なキーワードとなり得るだろう。

本稿は紙幅の関係で簡単な報告に止まったが，自身の経験と論点を整理しながら，今後考えを深めていきたい。

1）原文 http://www.jmm-muziejus.lt/
2）「ファイバーアート」という言葉は80年代から急速に広がったものの，「素材に拘泥し限定的」という批判もあり，「クレイワーク」などともに使われることが少なくなった。美術系大学の教員で組織する染織造形の教育者組織名も「日本テキスタイルカウンシル（Japan Textile Council）」である。しかしこれらの言葉・概念を明確に分類することもまた難しく，当然ながら重なる部分も多い。
3）継続的に研究している「工芸的造形の思考」とも関連し，作品にタイトルをつけてこなかった。本作は10年ぶりの「タイトルのある」作品。
4）＜方法としての工芸＞は本部会設立の頃からのテーマとしてあった。拙論「工芸概念の再考と美術教育Ⅰ～Ⅹ」（上越教育大学紀要・大阪教育大学美術科紀要）参照

研究ノート　アートセラピー部会から

# ポートレイト写真の撮影における「気づきと成長」のプロセス

瀬崎真也（医療法人梨香会　秋元病院）

## はじめに

2016 年 7 月 30 日、「第 61 回造形教育センター　夏の研究大会」（東京）において、写真家の植田峰子氏を招聘し、講演を行なった。植田氏は、ポートレイト撮影を専門とする写真家であり、女性カメラマン tahko のニックネームでビジネス・プロフィールやウェディング写真などの分野で活躍されている。私が植田氏の写真撮影を知るきっかけは、勤務先の病院で患者さんに向けて購入している雑誌「こころの元気 plus」を手にしたときであった。精神障がいを抱える方々やご家族の支援を目的とし、専門家からのアドバイスや当事者の生の声を掲載していることで知られ、2012 年に日本医学ジャーナリスト協会賞「特別賞」を受賞している月刊誌である。そして、この雑誌で大きな反響を呼んでいる内容のひとつが、読者である患者さんからモデルを募集して表紙写真を撮影することであり、植田氏が手掛けている。私の同僚（ソーシャル・ワーカー）がこの雑誌の編集長と知り合いであったことから、編集長を通じて植田氏に講演の依頼を行なった。植田氏自身が単独での講演に不慣れであることを心配したため、私との対談形式で講演を行うことで承諾が頂けた。

## 植田氏の写真　和解の笑顔

毎号の表紙を飾る患者さんの笑顔の写真。私は植田氏が撮影するポートレイトにいつしか魅了されるようになった。そして、私のなかでこの患者さんたちの笑顔の魅力とは何かと考えてみることがあった。精神科の患者さんが抱える大きな葛藤のひとつは、自分の病気を周囲に公表するかどうかである。周りの人々の病気に対する理解の乏しさや偏見があるいっぽう、患者さんたちは自分らしく生きたいと願っている。そして、病気を隠さずに生きると決意し、表紙モデルに応募する。私は、彼らの素晴らしい笑顔がしばしばメディアを飾る、勝利した時の笑顔とは異なる「和解の笑顔」ではないかと考えている。精神科の病気は感染症や骨折などの外傷のように「完治」がなく、病気の症状がある程度おさまって、支障なく日常生活が送れる状態にまで回復することを「治癒」ではなく「寛解」と言う。病気や障がいとうまく付き合いながらする彼らは、勝ち負けではない、人生において大切な「和解」を、他者と、自分と、抱える病気や障がいと、その他の諸々と結べることで笑顔が増していくのではないかと思う。そして、「和解」が必要とされているのは、精神科の患者さんに限ったことではない。社会全体やシステムとの和解だったり、家族や友人、職場の上司・同僚との身近な人々との和解だったり、あるいは自分自身との和解だったり…。現代社会の「勝ち組」「負け組」の言葉に象徴されるように、私達は激しい競争心を駆り立てられて、大切な和解を結べずにいることがある。私が彼らの笑顔に心ひかれる理由は、必要な和解を結べずにいる自分の不甲斐なさにあるのかもしれない。

こころの元気ｐｌｕｓ　2015 年 4 月号　表紙
ＮＰＯ法人　地域精神保健機構・コンボ

### その人らしさの魅力を写し撮る

講演は、植田氏がどのようにして、被写体の魅力的な笑顔を引き出し、写真に収めるのかを伝える内容であった。ポートレイト撮影専門のカメラマンになる経緯や「こころの元気 plus」表紙撮影でのモデルとのやり取りなどが植田氏から語られ、途中、来場者の一人をモデルに撮影の実演が行われた（詳細は、第 61 回造形教育センター夏の研究大会報告書を参照して頂きたい）。

植田氏は、プロフィール写真や雑誌モデルの撮影に際して、被写体となる顧客にカスタマー・シートの記入をしてもらい、彼らの趣味や関心事などを知ることから始める。そののち、スタジオや屋外のロケーションで、およそ 2 時間、さまざまな話題で会話しながら撮影を進めていく。モデルを指導しながら、被写体の Pose（ポウズ：姿勢）ではなく Pause（ポーズ：動作の停止）を撮影することを心がけると述べる植田氏だが、撮影の手法はあくまで被写体の内面的なものを引き出すことに主眼が置かれている。その人らしさの魅力や個性の輝きを写し取るのである。質疑応答では、植田氏が実演で撮影したポートレイト写真について、来場者から「感動しました」という感想が聞かれた。しかしながら、植田氏は「私はあくまで、〇〇さん（モデルさんの名前）が持っている、元々の素晴らしい個性や魅力を引き出しただけです。それが私の仕事です」と応じた。米国の高名な写真家であるルイス・ハインは、かつて“写真は暗闇に灯りをともし、知られずにいた部分に光を当てることができる”と述べたが、植田氏のポートレイト撮影は、暗闇に隠された部分に光を当てて、その人らしさの魅力を見つけ出す。それは、単に観る者を魅了する写真ではない。被写体となった人々の心を元気づける写真である。「こころの元気 plus」のある表紙モデルは、「いじめから顔がコンプレックスで、引きこもりになった。統合失調症になってから何十キロも太っておばさん顔になり、セルフイメージがとても悪かったが、（植田氏による）今回の撮影で自分のことが好きになれた」と雑誌のインタビュー（こころの元気 plus 2015 年 9 月号）で語っている。魅力的な自分を写し取った写真に導かれて、自分自身を肯定する一歩を踏み出せたのである。

**実演で来場者のひとりをモデルにして、植田氏が撮影したポートレイト。第 61 回造形教育センター夏の研究大会報告書より。**

### 相互的な気づきと成長のプロセス

ポートレイト写真の撮影を通じて、被写体となった人々の潜在的な資質が明るみになり、彼らが発展的に変容していくプロセスに、私は心理療法との類似性を感じる。心理療法において、クライアンは自分自身の内にある未知なるものに気づかされながら自己の成長を遂げる。また、これはセラピストからクライアントへの一方的なやり取りではなく、セラピスト自身もクライアントとの関わりを通じて意識していなかった自己のある部分に気づかされることもしばしばであり、双方向に作用する。講演の中で、植田氏は自分の才能や職業の適性に思い悩んでいた時期に、社会で活躍する実業家や専門家のプロフィール写真を撮影しながら、次第に彼らから周囲の人々に活力を与えて仕事をする姿勢を学んだと述べているが、カメラマンと被写体の人々の間にも、心理療法でいうところの相互的な「気づきと成長」があるのではないかと考える。同様に、相互に影響を及ぼし、発展的に変容していくプロセスは、教育における教師と生徒、医療における治療者と患者の関係にも起こりうると言ってよい。

### おわりに

「こころの元気 plus」を刊行する地域精神保健福祉機構・コンボのウェブサイトでは、毎号の表紙写真、植田氏による撮影風景、モデルの方々に向けて行なっている撮影後のインタビュー動画が視聴できる。また、植田氏の主催しているフォトスタジオ『サプリフォトサロン』のウェブサイトでも、ギャラリーページのなかで植田氏が撮影したポートレイト写真などを見ることができるので、併せてご覧頂きたい。

2016 年度 美術科教育学会 リサーチフォーラム in 京都

# 美術科教育における 〈学習者×教師〉 －質の高い授業構築をめざして－

隅敦（富山大学），竹内晋平（奈良教育大学）

児童･生徒にとっての豊かな学びのある授業づくり，それを支える教師の授業力向上は，図画工作・美術科においても重要な課題であると考えます。

本シンポジウムでは，学習者間および学習者・教師間で成立する言語等を含めた様々なコミュニケーションが，図画工作・美術科の学びにどのような効果をもたらすのかを探ります。そして，美術の学びにとって有効な指導のあり方について，登壇者およびフロアの皆様との間で幅広い議論を進めたいと思います。

◆開催日　2017 年 1 月 7 日（土）
午後 1 時 30 分～4 時 30 分
（受付開始：午後 1 時 15 分）

◆会　場　京都テルサ・東館２Ｆ
（京都市南区東九条下殿田町７０番地）

◆アクセス
「ＪＲ京都駅」より 南へ徒歩約１５分
「近鉄東寺駅」より 東へ徒歩約５分
「地下鉄九条駅」④番出口より 西へ徒歩約５分
「市バス九条車庫」より 南へすぐ

◆登壇者
・研究発表・３本：
隅敦（富山大学）
＋ 安江有沙（白山市立明光小学校）
竹内晋平（奈良教育大学）
＋ 長友紀子（奈良教育大学附属中学校）
藤井 康子（大分大学）
・指定討論者：　山口喜雄（前 宇都宮大学）
・ファシリテーター：　三根和浪（広島大学）

◆参加方法
・無料。学会員以外の方も参加できます。できるだけ事前申込をお願いします。
・参加申込メールアドレス
artedu.kyoto@gmail.com
・12 月 26 日までに上記アドレス宛に，下記の必要事項を記入してご送信ください。
（件名「リサーチフォーラム申込／ご氏名」，
本文「ご氏名，ご所属（複数の場合は全員分）」）

◆後　援　京都市教育委員会

京都テルサへのアクセスマップ

◆その他
・当日プログラム等の情報につきましては，下記の特設サイトにて後日，お知らせする予定です。
http://takeuchi-lab.net/symposium.html

・参加申込以外のお問い合わせは，下記いずれかのメールアドレスまでお願いします。
隅敦：sumi@edu.u-toyama.ac.jp
竹内晋平：shimpei@nara-edu.ac.jp

2016 年度 美術科教育学会 乳・幼児造形研究部会 案内

# 乳・幼児における造形教育の未来

塩見知利（大阪成蹊短期大学）

乳・幼児造形研究部会は 2010 年 6 月より関西学院大学で実践報告と解説、幼稚園教育要領及び保育所保育指針に関わっての講演等の内容で部会が始まりました。その後、各地域での実践発表と併せて、幼小連携、子どもの身体感覚、幼児教育における歴史的視点からみて、素材研究や教材研究の視点からなる研究発表や、保育現場と養成校の役割についての協議、東日本大震災後の福島における乳幼児が描いた身体についての研究発表がありました。その後、「造形表現の原点を探る」をテーマに乳・幼児の造形とは何かを問うなどして、出発から 7 年目となり、幼児の造形には何が重要なのかを考えてきました。その一方で乳・幼児から始まる美術教育との関連について研究を進めてきています。しかし、乳・幼児は非常に未分化です。したがってともすれば保育と言った大きな枠組みに吸収されがちです。造形だからこそ生まれる特質を失いかねません。幼児期の発達や心理の変化は急速で激しいものです。実際の保育現場ではこれらのことを無視して造形を語ることはできないと言えます。

2013 年からは、そのことを踏まえて養成校として子どもの視点をどう生かすか、子どもの造形に大切なことの協議を開始し、幼児から小学校を統合的に考える造形教育の提案や、現場の実践を中心に生きる力としての造形教育を考え、「生きる力の基礎を育む造形表現のあり方」、保育者と養成校が共に抱える問題を発達の観点から捉え、アートとしての造形活動があたえる発達と関係それと同時に幼児の心理への影響、前回はプレ学会として「表現の地平―表現活動の原点から創造する身体へ―」と題してチンパンジーの研究から幼児のイメージの発生を探るべく討論を通してさまざまな研究発表と実践発表、協議を行ってきました。

## １．2016 年度 第１回部会の趣旨

①今回は、これまでにも継続して検討を行ってきた「乳・幼児の造形が教えてくれる 10 項目」についての部会として提案をまとめるべく、原案を基に協議を行います。部会として乳・幼児造形教育に関する重要な視点をさまざまな角度から協議を行って検証し、10 項目に絞り込んだ結果を提言し、後日、学会やＨＰ等での公表を行い、乳幼児の造形について、そして、その研究についての基礎を共有していく予定です。

また、将来的には、美術教育における幼児造形教育の学的体系の確立が必要とされるため、本部会では、その理論的実践的な基礎研究を支えるための方法を探求していきます。

③部会代表からの提言「乳・幼児造形教育学成立に向けて」幼児の身体性を中心においた造形教育は活動の分野が未分化であるがゆえに、感覚から感性・知覚から認識へと学校教育全てを視野に入れた活動になると考えられます。したがって乳・幼児造形教育学の確立への道筋は美術教育に大きく影響を与えるものとなるでしょう。

加えて、②新しい教育要領・保育指針の方向性が気になるところだと思いますので、現時点でわかっています変更点や方向性をもとにお話をいただく予定です。

## ２．2016 年度第 1 回 乳・幼児造形研究部会案内

日時：2016 年 12 月 10 日（土）13:30～16:30
　　13:00 受付開始
会場：十文字学園サテライト（5 階 ICT 室）
テーマ：「乳・幼児造形教育学の構築に向けて
―幼児の造形に関わる 10 の提言―（仮）」
＊詳細は後日チラシで案内します。
プログラム内容
①乳・幼児の造形が教えてくれる 10 項目
今後の理論を固める基盤として、部会員を中心にこれまでの議論を踏まえての 10 項目について提案と協議を行います。そのため、乳幼児造形研究部会の部会員に積極的に参加をお願いします。
　報告と提案　塩見知利（丁子・宮野）
②学習指導要領、幼稚園教育要領の改訂をどう見る部会の果たす役割の一つである保育現場とのつながりあるいは養成校との連携を趣旨に、次回の幼稚園指導要領の改訂の方向性の確認と変更点について考えます。小学校への接続の重要性・非認知能力の重要性・子育てへの支援等を造形あるいは美術教育の観点からどのように理解しまた見るべきなのかは大切です。講師
平田智久
③部会代表からの提言「乳・幼児造形教育学の構築に向けて」

## 本部事務局より

**■2016 会計年度までの会費納入はお済みですか。**

「2016会計年度会費」は，2016年7月末日までに納入いただくようにお願いしています。もし，未だの場合は，至急の納入をお願いします。3月の年次大会，リサーチフォーラム，地区会，学会誌刊行などの学会運営は，会員の皆様の会費により運営されています。

ご自分の各年度の年会費納入状況については，以下の「会員情報管理システム」にログインすることにより確認が可能です。
https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/AAE

なお，納入状況に疑問がある場合には，下記本部事務局支局アドレスにお問い合わせ下さい。

**会費納入に関するお問い合わせ先：**
（株）ガリレオ　東京オフィス　担当者　和久津君子氏
[窓口アドレス]g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

**注意事項**

学会誌への投稿並びに年次大会での口頭発表に際しては，投稿や申込みの時点で以下の２つの条件を満たしている必要があります。

①会員登録をしていること
②当該年度までの年会費を全て納入済みであること

今年度，学会誌への投稿締め切りは，毎年８月下旬，大会での口頭発表申込みは，11月～の予定です。十分にご注意下さい。
*会費を２年間滞納した場合は，会員資格を失います。

**■会費振り込み口座名，番号**

２月の学会通信に同封の振込用紙，郵便局にある払込用紙または銀行等からの振替により下記の口座に納入してください。

銀行名：ゆうちょ銀行
口座記号番号：00140-9-551193
口座名称：美術科教育学会 本部事務局支局

通信欄には，「2016会計年度会費」等，会費の年度および会員ID番号を記入してください。また，ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込の受取口座として利用される場合は下記内容を指定してください。

店名(店番)：〇一九(ゼロイチキユウ)店(019)
預金種目：当座
口座番号：0551193

**■大学院生等への会費減額措置(申請は毎年必要)**

大学院生等は，所定の手続きにより，年会費を半額(4,000円)に減額する措置を受けることができます。会費減額措置を希望する大学院生等は，毎年，５月中に各自，申請手続きをすることになっています。申請しない場合は，減額措置を受けられません。未だ手続きがお済みでない方は，学会ウェブサイトをご参照ください。
http://www.artedu.jp/bbg4um0dy-8/#_8

なお、本制度は，大学院生等に対する経済的な支援を目的として設けられています。指導教員の先生は，申請者が以下のいずれかに該当するか確認の上，申請させて下さい。

１　常勤職を持たない「大学院生又は大学院研究生」である。
２、勤務先を持つが，当該会計年度の間、無給の「大学院生又は大学院研究生」である。

**■学会誌第38号に投稿され、掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様へ**

学会誌第38号に投稿された会員で、掲載が許可された後、掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様にお知らせ致します。公費払いとは、大学研究費や科学研究費補助金などで支払うことをさしています。掲載負担金の請求は，掲載ページ数が確定した時点（３月初旬を予定）でお伝えします。本部事務局支局からの請求書にしたがってお振込みください。ただし，各所属先が求める形式で請求書類を別途用意しなくてはならない場合は，そこから本部事務局支局と相談・交渉し始めたのでは，手続きが間にあわないことがあります。以下の留意点を読み，各所属先で前もってご確認いただき，相談・交渉するなど今から準備を始めて下さい。

＜留意事項＞

１．原則として，必要な書類は，投稿者自身で作成いただき，書類等に捺印が必要な場合は，本部事務局支局までお送りください。作成いただく書類は，本部事務局支局からの「振込負担金請求書」以外の書類全てとなります。また、送付前に事前に以下までご連絡下さい。

２．投稿者自身による「立替払い」を原則と致します。

３．上記1，２を原則としますが，大学事務局と本部事務局支局が直接やり取りをしなければいけないケースがあります。この場合には，以下まで、手続きの概要，事務担当者の連絡先などをメールで知らせて下さい。

美術科教育学会 本部事務局支局
〒170-0002 豊島区巣鴨1-24-1 第2 ユニオンビル4 階
（株）ガリレオ　東京オフィス　担当者　和久津　君子氏
[ 窓口アドレス] g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

迅速な手続きのため，ご確認及びご準備について、ご協力をよろしくお願い致します。

**■住所・所属等変更，退会手続き**

住所，所属先等に変更のあった方は，すみやかに本部事務局支局までご連絡ください。退会を希望される場合は，電子メールではなく，必ず文書(退会希望日を明記してください)を郵送にてお送りください。あわせて，在籍最終年度までの会費納入完了をお願いします。

**■新入会員**

2016年3月9日以降、2016年8月24日までに入会申込書が受理され，9月14日の理事会で入会が承認された方は下記の通りです。(受付順)　橘 美知子、猪 泰介、吉田 奈穂子、櫻井 晋伍、早川 陽、柴田 洋佑、羽太 広海、田中 夕子、水城 久美子、深谷 千寿、竹綱 珠衣（以上11名）

**■「オンライン名簿(検索)システム」**

学会HP(http://www.artedu.jp)左のメニュー「会員名簿」をクリックして「名簿(検索)システム」
https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/member_search/AAEにお入り下さい。公開項目は，もちろん各会員が決定できますが，会員相互の交流のために，所属先住所，メールアドレスなど可能な範囲での登録をお願いします。

**美術科教育学会 本部事務局**

■ 聖心女子大学　〒150-8938　東京都渋谷区広尾4-3-1　聖心女子大学文学部
水島尚喜(代表理事) mizusima@u-sacred-heart.ac.jp　TEL 03-3407-5811

■ 東京学芸大学　〒184-8501　東京都小金井市貫井北町4-1-1　東京学芸大学　芸術・スポーツ科学系
相田隆司(総務担当副代表理事／本部事務局長／庶務・会計・規約) t-aida@u-gakugei.ac.jp TEL 042-329-7594
西村徳行(学会通信・学会名簿・会費管理) nishimur@u-gakugei.ac.jp TEL 042-329-7608
笠原広一（本部事務局運営委員／学会通信）kasahara@u-gakugei.ac.jp　TEL 042-329-7610

■ 横浜国立大学　〒240-8502　神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2　横浜国立大学教育学部
大泉義一（ウェブ・メール配信）oizumi@ynu.ac.jp TEL045-339-3453

■ 三重大学　〒514－8507　三重県津市栗真町屋町1577　三重大学教育学部
上山　浩(ウェブ・J-Stage)　ueyama@edu.mie-u.ac.jp　TEL 059-231-9280

**美術科教育学会 本部事務局 支局**

■ （株）ガリレオ(www.galileo.co.jp)　東京オフィス　〒170-0002　豊島区巣鴨1-24-1 第2 ユニオンビル4 階
（担当者　和久津君子氏 ）　TEL: 03-5981-9824　FAX: 03-5981-9852